

# 石を漱ぎ流れに枕す

湖国の水辺に珪藻を求めて

主任学芸員（陸上生態系学）  
大塚泰介

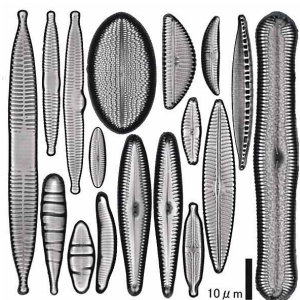


琵琶湖博物館はしかけの活動団体である「たんさいぼうの会」では、珪藻という小さな生き物を調べています。「たんさいぼうの旅」「たんさいぼうの小さな旅」などと称して、これまでに滋賀県内の3つの湿原と30あまりのため池、そして3つの河川の全域調査をしてきました。私は「影の会長」として、すべての調査に同行してきました。

河川での珪藻調査に、歯ブラシは必需品です。水中の石の表面にはりついている珪藻を歯ブラシで丹念にこすり落とし、蒸留水ですすいでバットから試料ビンへと洗い流すのです。河原に座り込んで、流れの音を耳にしながら石をすすぐたんさいぼうの会はまさに「石を漱ぎ流れに枕す」人たちの集まりです（負け惜しみが強いとか、言い逃れがうまいとかの意味ではありませんの

で念のため）  
こうして得られた標本をそのまま観察しても、珪藻の種を同定することは困難です。同定のためには、細胞を覆うオパール製の殻を細かく観察しなければなりません。そこで標本の一部をクリーニングして永久プレパラートを作製し、中に含まれている珪藻の殻の顕微鏡写真を撮影して研究材料にします。

たんさいぼうの会が撮影した写真の一部は、琵琶湖博物館インターネットページの「珪藻図鑑」で公開されています。



安曇川上流 大津市 丁でとれた珪藻

「湖国もぐらの会」は、鉱物や化石に魅了され、採集したり研究したりしている不特定多数で構成されています。2001年、琵琶湖博物館でもぐらの会と博物館共催の展示会が行われ、見学会、採集会、講演なども合わせたのべ約2万人の参加者がありました。ボランティア編集で、会場を取材した私は、意外なほどたくさん

の化石や鉱物が自分の知っている地域にあることが驚き、しかも通常の展示と違って異様なぐらいびっしりと並べられた石たち

に採取者の情熱に圧倒され、閉館時間になるまで展示物に見とれてしまいました。  
それから約5年が経過し、再度鉱物化石展が開催される運びとなり、手始めに2006年4月5月にかけてプレ鉱物化石展を1階の新交流空間にて行いました。初めはちょっと手伝わただけのもりで

「もうと展示を楽しんでもらうにはどうしたらいいかな？」との思いから、何度も見ているはずの琵琶湖博物館の展示室を改めて見直してみると、わかりやすい説明と今まで気付かなかった

## 湖国の大地に夢を掘る

湖国もぐらの会 世話人 西岡佐利子



### こんにちは！ 展示交流員です。



私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。

今回は、水族展示室で行われた「交流員と話そう」からの取材です。来館者の方とどんな交流があったのでしょうか。

「水生昆虫タガメ」  
(弓削交流員)  
このテーマを選んだ理由は？

ギャラリー展示「タガメのため池探検」があり、タガメにすごく興味を持ったからです。  
名前は知っていたけど、実物を見たことがない方が多く、「水生昆虫の王様」と言われていることも紹介したいと思います。

どんな交流をされているのですか？

まず水槽のタガメを見てもらうことから始めて、来館者の反応を見ながら交流しています。カメムシの間であるなどクイズをしながらいろんな話をすると盛り上がる時があります。



印象に残ったことは何ですか？

最初は、虫だということでした。最初は、「キラー」と言って後ずさりされていたのが、クイズをした後に、ちょっとタガメが好きになったと言われる方がおられたのが印象に残っています。また、詳しく知っている子どももたまにいますので驚きます。

「チョウザメ」  
(吉田交流員)  
このテーマを選んだ理由は？

「サメやー」と言って通り抜けて行かれる方の多い人気のコーナーで、もう少しこの魚のことを知ってもらいたいと思ったからです。

来館者の方とはどのような



子どもたちとチョウザメの話

な交流をされましたか？

サメとは違うこと、棲んでいるところなど簡単なお話しをしながら交流しています。

来館者の反応はどうか？

サメじゃないことがわかって、「へーそうか」と驚いて帰っていかれる方がいます。琵琶湖でも捕まることが知っている来館者の方もおられ、そうするとブラックバスの話にまで広がることもあります。

## 交流ノート